

## 四日市公害訴訟判決39周年・市民集会

### 講演 「四日市・水俣をつなぐもの」

国際基督教大学教養学部教授

池田理知子

お招きいただきましてどうもありがとうございます。

本日は、「四日市・水俣をつなぐもの—語り継ぐ—」の大切さを考える」ということでお話しさせていただきます。

#### 語り継ぐこと

私が現在進めている研究というのが、水俣病を語り継ぐこと、その意味を問うということで、中心は水俣病資料館で語り部をなさっている方が話している講話の場というものがどういう力を持っているのか、ということです。

その研究のきっかけというのが今回の原発事故と非常に関係の深いものなのですが、公式ホームページからとってきたこの映像にあるとおり、青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場に関するドキュメンタリー映画を観たことが、現在の私の研究につながっています。これを見たことがきっかけになったわけで、そう考えると今回の事故は私がやっていること、そして私の生活、全てつながっているのかなという気がして、とても平静ではいられないという思いを持っています。

私は、公害といった問題を語り継ぐということの意義やその重要性、そういったものを感じて研究している、つまり、過去の悲劇を繰り返さないためにも、語り継ぐことが大切なのだ、ということ为前提として研究を進めているわけですね。にもかかわらず、同じような過ちが再び起こってしまったことが非常に悔しくてたまりません。

今日は、「四日市・水俣をつなぐもの」ということでお話をさせてもらうわけですが、まず私が、どうやって水俣あるいは水俣病と出会っていったのか、ということを始めにお話ししてから、語り継ぐということの意味について、私なりの考えを述べさせていただきたいと思っています。

私と水俣病との出会いというところまでがちょっと長いんですけども、私にとっては非常に重要な意味を持っていると思っていますので、10分ほどお付き合いください。

先程、話しました『六ヶ所村ラブソディー』という映画なんですけれども、これは2006年の作品です。そこには、青森県上北郡六ヶ所村にある使用済み核燃料再処理工場、そこに関わる人たちの苦労だとか苦悩といったものが描かれています。四日市でも上映会が開かれたのではないかと考えているんですけども、この映画をごらんになったことがある方、ちょっと手をあげてもらえますか。(ハイ) はい、ありがとうございます。二名ほど手があがっておりましたが、ご覧になった方はお分かりだと思います

けれども、十数年前からこの再処理工場の計画に反対する運動を続けている人、それから近隣の地域で農業を営んでいて、その計画を阻止したいと思って活動を続けている人、それからその再処理工場内で仕事をしている人、あるいはそこから仕事を請け負っている人、そういった人たちがこの映画のなかには登場するわけですね。ですから、いわゆる核燃料再処理工場反対、というものをうたった映画ではないわけです。反対派も賛成派もそれぞれが苦悩を抱えている、といったことを描いた作品だと思っています。私としては、非常に完成度の高い映画なのではないかと思っています。

ただ、皆さんもご存知のように、ドキュメンタリー映画というのはいくら優れた作品だとしても、それほど劇場公開されるわけではないですよ。今回、澤井余志郎さんを撮った『青空どろぼう』という映画が作られたわけですが、この間東京の劇場で公開されていたようですが、公開の機会というのはある程度限られてしまっているわけですね。ですから、それほど多くの人目に触れるわけではない、というのが一般的なイメージだと思います。私もこの映画に対して、初めはそういう印象を持っていました。ところが、この映画はちょっと違ったんですね。劇場公開の機会もそれこそ限られてはいたんですけども、自主上映会というのがあちこちで開かれていて、次々とこの映画がいわゆる「拡散」していく、つまり多くの人がこの映画を観ている、そういう映画だったわけです。

まず、どのくらい観られているかと言うと、正確な数字ではないですが、2008年の11月に監督である鎌仲ひとみさんが出された本の中で、上映会の数とその時点で450箇所を超えているということが述べられていました。ですから、おそらく現在では500箇所は優に超えているのではないかと思います。

私がこの映画を最初に観たのは、2007年1月、東京の東中野にある劇場でした。先ほどの『青空どろぼう』が上映された場所でもあります。二回目は、この映画の前に作られた作品、それが『ヒバクシャ』という映画で、これと『六ヶ所村ラプソディー』、それから鎌仲さんのトーク、というのがセットになった自主上映会です。この『ヒバクシャ』なんですけれども、ちょっとだけ簡単に説明しますと、これは場所としては広島、長崎、それからイラク、そしてアメリカの核兵器をつくる工場があるハンフォードという地域ですね、それらの場所を結んだ作品です。主に内部被曝を問題にした映画とってよいのではないかと思います。この二つの作品、それから鎌仲さんのトークが聞ける、というのでその上映会に足を運んだわけです。

その時の主催は、フェアトレードを行なっているグループだったんですね。そこに行って私が非常に驚いたのは、『六ヶ所村ラプソディー』という映画の吸引力というか、人を引きつける力というか。ここに来た人たちが次々に、自分たちでまた上映会をやっていくのではないかと、という予感がして非常にびっくりしたわけです。もちろん、うちの大学でも早速この映画の上映会をやりたいということで、鎌仲さんに申し込んで行なった、という経緯もあります。

それと同時に、私はこの映画がどんどんどんどん広がっていく、というこの状況に、非常に興味を持ったわけですね。それで、まずとっかかりとして、六ヶ所村がある青森県で、この映画に登場した人や自主上映会を行なった人たちに話を聞いてみる、ということをやったわけです。

それから、核燃料再処理工場がもし本格的に稼動した場合は、放射能による被害が発生しますよね、もちろん。そうすると、その被害のなかで一番損をするといわれていた地域が、岩手県だったんですね。それはどういうことかという、青森県に対する補償金というのは用意されている。だけど、岩手県に対しては一切そういうものは用意されていない。また、放射能による被害についてもあまり知らされていない、というようにいわれていました。ですから、そういう意味でも非常に被害を受ける地域である

わけなんですけれども、そこでどういう上映会を行なっているのか、どういう人たちがどういう気持ちでその上映会を行なったのか、というのを聞きに行こうというので、次に訪れたのが岩手県の宮古市でした。

今、スクリーンで映し出されているのは、宮古市にあるシネマリーンという劇場のホームページから取ってきたものです。そこにも書いてありますけれども、ここは岩手県沿岸部唯一の映画館で、市民活動によって生まれ、日本で唯一の映画の生活協同組合が運営している、そういう劇場だったんですね。宮古市では、二回上映会が行なわれていました。一回目は、いわゆる民間というか、どなたかが上映会を企画したいということでやったんですけれども、二回目の上映会が、この宮古市にあるシネマリーンというところで行なわれています。そのときに、すごく驚いたのは、詳しくは端折りますけれども、地方でこのような上映会を行なう、上映会に行く、ということの難しさです。シネマリーンというのは、一般の劇場なわけですよ。一般の劇場でやれば、誰でも足を運びやすくなるということと、そういう場を作るといのが非常に重要なんだということを学びました。

ちょっと余談なんですけれども、シネマリーンがこのあいだの震災の影響でどうなったのかというのが心配で、このホームページを訪ねてみたんですけれども、震災の影響もそれほどなく、今も上映活動をやっているということで安心しました。

それで話を戻しますと、核燃料再処理工場というのは、皆さんもご存知だと思いますが、原子力発電所です。そこでウランとプルトニウムに分け、再び燃料に使用するための加工処理を行なうところです。つまり、核燃の問題にかかわる以上、原発のことも知らなければ、ということで、そうこうしているうちに、NPO 団体の原子力資料情報室主催のスタディ・ツアーに参加することになりました。それが、2008年10月のことでした。この映像はその時のスタディ・ツアーのチラシですね。このチラシを見て、行こうと決めて参加したわけです。

## 新潟水俣病との出会い

このツアーは、2007年7月に起きた新潟県中越沖地震を受けて、柏崎・刈羽原発が位置する地域を訪れ、そこで原発再開に反対している人たちの話を聞いたり、地震の被害の実態を確認することが主な目的となっていました。これは二泊三日のツアーだったんですけれども、このツアーが私の研究にとって一つの転機となりました。それはどういうことかと言いますと、このツアーのなかで、ある新潟水俣病の語り部の方と出会ったことがきっかけでした。私はこの出会いを、カッコつきの「不幸な出会い」と自分では呼んでいますが、それは、これからお話することが主な理由です。その時のことを石牟礼道子さんや緒方正人さんたちが主催している「本願の会」の会報『魂うつれ』に書いたもので、ちょっと読ませていただきます。「本願の会」は、「水俣病を生き残ってきた証を後世へ呼びかける事業をはじめたい」という趣旨で1994年3月に発足しました。具体的には自分自身の手で石を見つけて、ここにあるようなお地蔵さんを彫り上がったら水俣湾の埋め立て地の一部に設置するというような活動を行なっています。その会報に書いた文章をちょっと読ませていただきます。

2008年10月、新潟を訪れた私は、そこで始めて新潟水俣病の語り部と出会った。あるNPOが主催する二泊三日のスタディ・ツアーの最終日のイベントの一つとして、語り部の講話が組み込まれていたのだった。従って、語り部の講話は盛りだくさんのプログラムに皆が疲れ果てたころのほぼ

最後のイベントで、いわば付録のような印象を拭いきれないものだった。私と水俣病の語り部との「不幸な出会い」は、こうして始まったのだった。

語り部の家族を襲った新潟水俣病の悲惨な出来事と自身の病との闘い、そして水環境の保全を訴える語り部の言葉は「重い」ものであるはずなのに、まるでビデオ映像を見ているかのように現実味が薄かった。周りの参加者にしても、眠そうにしている人や実際に居眠りをしている人までいたのだった。こうした「重い」言葉とオーディエンスの「軽い」態度との対比に違和感を覚え、それを口にしたのは、まず私のとなりに座っていた夫だった。夫が「何か変だ」とつぶやいたとたん、漠然と感じていた私の居心地の悪さもさらに増していったのだった。

私は、新潟で感じたあのときの違和感が何だったのかをはっきりさせようとするために、水俣病を伝える語り部の研究をしているような気がする。研究は始まったばかりで、まだその答えは見つかっていない。だが、これまでに三度水俣市を訪れ、講話を聴き、また新潟にも再び足を運ぶ機会があったなかで考えたことは、最初の「不幸な出会い」は、私たちオーディエンスの側に多分に問題があったのではないかということだ。私たちが、なぜツアーの中に新潟水俣病の講話が入っているのかを真剣に考えなかったことが、あの場を「不幸な出会い」の場としてしまったのではないだろうか。

丸木位里・俊が『水俣・原発・三里塚』を描いたように、原発問題と水俣は根底でつながっているのに、そこを見ようとしなかったのは私たちであった。原発がなければ今の便利な生活は維持できないというプロパガンダのもとに、更なる原発建設を容認する多くの人びとと、チッソや昭和電工が生産する便利な製品を何も考えずに使っていた私たちの姿は重なる。いまだに公にはされていない原発に伴う被曝の実態と、水俣病の被害の実態も同様だ。水俣病の問題に関わるということは、私たちの生活そのものを見つめなおすことに他ならないのだ。

2009年10月、再び新潟を訪ね、一年前に聞いた語り部の方と再会した。まったく別のオーディエンスに対して語りかける彼の語りは、前回は感じるができなかった輝きを放っていた。語り、語りかけられる行為とは、両者の協働作業であることを改めて実感したのだった。

以上ですが、この文章を書いたのは、2009年11月です。その時から換算して約1年半、私が水俣や四日市、そして沖縄で学んだことをこれからお話ししたいと思います。

## 水俣から学んだこと

私が現在行なっている研究は、先ほども言いましたが、公害を語る語り部がどのような役割を果たしており、実際の講話の場でそこにいる人たちとどのような関係性を構築しているのか、といったようなことです。ですから、私の主な研究のフィールドは、水俣市立水俣病資料館の講話の場ということになります。新潟の資料館にも足を運んでいるわけですがけれども、実質的にそこで講話を行なっている人というのは二名しかいらっしゃらないんですね。講話の回数も水俣の資料館に比べると非常に限られているわけです。ですからどうしても水俣市のほうに頻繁に訪れることになってしまいます。ただ、新潟の資料館でも新たに四名の方が語り部候補として名乗りを上げていて、今、一生懸命語り部になるための訓練をしている、ということですので、今後はもう少しそちらの方にも足を運んでいきたいと思っています。

ですけれど、今回は水俣市の資料館のを中心に話していきたいと思います。

水俣市の資料館は、1993年1月4日にオープンしています。そして、語り部の講話というのは、1994年から始まっておりまして、すでに17年の歴史をもっているということになるわけです。

現在の講話セッションは、最初に約15分のビデオによる水俣病の解説というのをやります。その後、だいたい45分ぐらい、語り部の方が話をする、というスタイルで行なわれています。この映像は語り部の講話の様子ですね。これは資料館にある語り部室で行なわれている講話です。もっと人数が多くなると、となりに情報センターという国の施設なんですけれども、渡り廊下でつながっている施設ですね、そこに大きい会場があるので、そちらで行なわれます。そこは260名入るので、例えば訪問校が3、4校重なったりしますとそちらの方を使うということになっています。時期によってばらつきというのはあるんですけれども、6月や秋は生徒さんたちがいっぱい訪れる時期ですね、そういう時期というのは予約が集中します。そうすると、だいたい毎日、それも一日に3、4回講話が行なわれるというようなこともあります。

ちょっとわかりづらいかもしれませんが、この映像は2011年6月の講話の予定表です。これ以外にも時々飛び入りで予約が入ったりということもありますが、これを見ていただくと分かるように、多い日は本当に多いですね。事前の予約が必要で、原則として10名以上の団体でなければ申し込むことができません。ただし、当日でも席に余裕がありましたら、その団体と一緒に講話に参加することはできます。ですから私も、こうした団体と一しょに参加させてもらい、そこで参与観察をしています。それが私の研究のメインということになります。

ここでちょっと、水俣病資料館のホームページに書かれてある「語り部制度」の説明を覗いてみたいと思います。ちょっと読み上げますと、

水俣病資料館では、水俣病の苦しみに負けずたくましく生きることの尊さと、水俣病に対する認識を深めていただくために、患者の方から貴重な体験を直接聴講できる「語り部制度」が平成6年10月より始まりました。

現在は13名の語り部がいます。語り部が訴える事実と未来への呼びかけは、訪れる人たちに感動を与えています。

というような説明がホームページではなされているわけです。

ここでは13名の語り部がいると書かれていますが、現在講話を実際に行なっているのは11名です。そして、その11名のうちの半分近くの5名が70歳以上です。

また、ここには「患者の方から貴重な体験を直接聴講できる」とありますけれども、患者というよりも、患者家族の立場で語られる語り部の方も4名ほどおられます。それからさらに、ホームページには載っていないのですが、「語り部補」として二名の方が登録しておりまして、この方たちも講話を行なうことになっています。といっても、めったにこの方たちが登場することはないわけですね。むしろ、依頼がいくことは滅多にないというふうに言った方が正確だと思います。まずはこうした状況を押さえたうえで、次に私が現状の語り部制度が抱える矛盾だとか問題点といったことについてお話ししたいと思います。

まず指摘しておきたいのは、もし語り部を水俣病患者に限定するとすれば、語り部になる人たちの数が次第に減っていくということですね。いずれ誰も語れなくなってしまうということが起こってしまうのではということです。ここで水俣病患者というのが誰を指すのかというのは、このことは非常に問題もあるんですけども、それはちょっと置いておきたいと思います。

患者が高齢化していること、そのことの危機感というのは、資料館側ももっているのだと思います。数年前に川本愛一郎さんと杉本肇さんという二人を語り部に加えたわけですね。ですからこのことから、何とかしなきゃいけないんじゃないか、という資料館側の気持ちも伝わってくるような気がしています。

この川本愛一郎さんと杉本肇さんのことについてちょっとご説明したいと思いますが、先ほどの映像のなかにも机の上に座ってチツソの島田社長と交渉していた姿、覚えていらっしゃる方も多いかと思いますが、あの川本輝夫さんのご息が川本愛一郎さんです。チツソと直接交渉を行なったグループのリーダーですね。その方の息子さんなんですけれども、

1958 年3 月25 日生まれ

水俣病患者家族。父はチツソ水俣病患者連盟委員長の川本輝夫氏（1999 年死亡）。

劇症で亡くなった祖父のことや子どもの頃の生活、支援者として水俣病患者をリードした父とその運動を支えた母を語る。

作業療法士・言語聴覚士として介護施設を経営。

2008 年5 月から水俣病資料館の「語り部」となる。

水俣市出月在住

ということなんですけれども、患者家族の立場で語られている方です。

もう一人の杉本肇さんなんですけれども、この方は、資料館の語り部でもあった杉本栄子さんのご子息です。

1961 年1 月18 日生まれ

水俣病患者家族。母は杉本栄子さん（2008 年死亡）

家族が水俣病になったときのこと、子どもの頃の生活、都会に出て水俣に帰ってきたこと、自分の身体の調子などを語る。

無添加のいりこなど漁業を営む。

2008 年5 月から水俣病資料館の「語り部」となる。

水俣市袋在住。

というように、ホームページで紹介されています。

この二人のように、患者家族の立場で語る姿勢というのは、私が思うには語り部の裾野を広げることにつながるのではないかと考えています。

それから次に指摘したいポイントなんですけれども、先ほど触れましたように、「語り部補」というカテゴリーです。その問題です。現在二名「語り部補」として登録されている方がいるんですけども、

この方たちのプロフィールというのは、ホームページ上には載っていないんですね。二人の写真をパワーポイントでお見せすることはできませんが、資料館に入りますと受付があり、その受付の右側にキャビネットがありまして、そのキャビネットに語り部の紹介を綴ったファイルがあります。そのファイルのなかにこの二人が紹介されていますので、それを紹介したいと思います。

お一人が、吉永利夫さんという方です。

1951 年生まれ（水俣市明神町在住。出生地：静岡県静岡市）

1972 年水俣市を訪れる。以来水俣病未認定患者等の活動にかかわり、(財) 水俣病センター相思社にて「水俣病歴史考証館」設立等を行う。

企業による環境汚染は、単なる自然破壊ではなく、家庭や地域をも崩壊させること。

水俣病患者が続けてきた「闘いの意味」を求めて生きてきたことを語る。

平成 13 年 NPO 法人水俣教育旅行プランニングを設立。

2007 年 6 月から水俣病資料館の「語り部補」となる。

と書かれています。今、水俣教育旅行プランニングは、水俣だけでなく出水支社もできたので、環不知火プランニングというふうに会社名を変えています。

もう一人の「語り部補」の方ですけれども、金刺潤平さんという方です。

1959 年 8 月 20 日生まれ（水俣市袋在住。出生地：静岡県沼津市）

1983 年大学卒業と同時に JYVA 一年間派遣ボランティアとして水俣へ。1984 年から胎児性、幼児性水俣病患者らと身近にある竹やイグサなどを原料にした紙漉きと機織の工房「水俣浮浪雲（はぐれぐも）工房」を始めたこと。その技術を海外に広めるべく、インドネシア、ドイツ、マレーシア、ブラジルなどで和紙のワークショップを開催。水俣病被害者を中心に水俣湾埋立地に野仏を祭る活動をする「本願の会」のことを語る。

2007 年 6 月から水俣病資料館の「語り部補」となる。

というふうになっています。

約 4 年間、この二人は「語り部補」をなさっているんですが、講話の回数は、ほんのわずかです。吉永さんはこれまでにたった二回行なっただけです。金刺さんは年に一回程度の依頼しかないということです。実際、私は 2009 年 6 月から 2011 年 7 月現在ですが、それまでに 30 回以上は資料館に足を運んでいると思います。「語り部」の講話に出席したのも、おそらく 50 回を超えていると思います。ですが、二人の講話というのは私はこれまで一度も聞いたことがありません。

資料館の「語り部補」を紹介している資料を見ますと、「語り部補」というのは、「語り部の体調不良などで予約講話に対応できない緊急時に対応する語り手」というふうになっています。

先ほど今年の 6 月の予定表をお見せしましたが、そういう予約状況から察せられるように、予約の多い月は、「語り部」になんとか都合をつけてもらって、やりくりしているのが実情です。特に、若い方になると現役でまだ働いているわけですね。その働いている方に無理してお願いするという状況が続いています。ですから、今後語り部の人数をどうやって増やすのかというのが、資料館の課題になってい

るはずだと思います。ですが、増える講話の需要に対する方策として、積極的に「語り部補」を活用しようというような動きというのは、今のところ見られないということです。

これは去年の11月に水俣病資料館で私が講演をさせていただいたときなんですけれども、この吉永さんが「語り部補」をもっと活用して欲しいということ資料館側に呼び掛けていたんですね。まず私は、この「語り部補」という、その「補」がつく名称自体に問題があると思っています。つまり、「語り部補」という名称が使われる限り、この二人の出番というのは極端に限られるという状況が続いてしまうのではないかとということです。この「語り部補」という名称ですね、これは二人が語る内容は別として、それだけで来館者を落胆させる効果をもっているのではないかとと思っています。水俣病資料館に来る人というのは、あらかじめある程度の事前学習を済ませている人たち多いわけです。修学旅行だとか総合学習、公害学習、そういった目的で訪れる先生だとか生徒たちがいるわけなんですけれども、そういう方たちは特にそうだと思います。そうすると、資料館では調べてきたことを確認するというだけで終わってしまうことになりかねないわけですね。ですから、あらかじめ想定した話しか耳に入らないといったことになってしまいがちです。これは、私がたまたま遭遇した事例なんですけれども、これからお話ししますが、そのことを如実に物語っているのではないかと思います。それは先ほどご紹介した川本愛一郎さんのときの話です。

彼の講話が終わった後で、引率の先生が挨拶にいらしたんですね。愛一郎さんがその先生に「今の話はどうでしたか」とお聞きになったんですね。そのとき引率の先生から出た言葉が、「事前学習で差別の問題を扱っていたので、その話が聞けてよかったです」というものでした。その講話を私も聞いていたのですが、その先生の言葉というのは、私からしてみると、愛一郎さんが言いたかったことを本当にちゃんとわかってくれたのかな、というようなものだったんですね。愛一郎さんは父親である川本輝夫さんのことを語るんですね。それによって、水俣病事件の核心に迫ろうとする。彼は水俣病事件という言葉に非常にこだわっているんですけれども、それはどういうことかということ、水俣病というのは単なる病気ではない、それは事件なんだ、つまり事件というからには主犯がいて、主犯チツソ、共犯が国、県という、そういう傷害殺人事件だ、ということを強調される方なんですね。話もそれを中心に展開する、というようなもので、そういう話が45分間で、その最後の方に、川本家に対する数々の嫌がらせの話というのが確かに出てきます。ただ、ポイントはそこではないように私は思います。もう何回も愛一郎さんの講話に参加させていただいていますけれども、やはり同じような構成で話が進むことが多いです。

これは、この先生のように、聞きたいこと、それから見たいもの、そこにしか注意がいかない、別にその先生を責めるという意味ではなく、私たちも一般的にやはりそういう傾向があるのではないかと、ということに気づかされたエピソードです。だとすると、そういうふうにして来館者が多い、多くの方がそういう傾向をもつ、ということだとすれば、名前からして「付けたし」みたいな「補」というのが付いているというのは、もう最初からそういうようにしか目に映らないんじゃないか、ということです。そういう来館者の志向性とでもいいますか、そういったものが「語り部補」という名前がある限り、彼らの出番を奪ってしまうことになるのではないかと危惧しています。

「水俣病」にかかわる多様な語りという点においては、吉永さんや金刺さんはこれまで水俣でいろいろな活動をなさってきて、いろいろな関係を築き上げてこられたわけですね。ですから、独自の視点で聴衆に訴えかけるものというのがあるに違いない、と私は思っています。ですから、自分にしかできない「水俣病」の話という観点から考えると、「語り部」と「語り部補」という境は、意味をなさないので



ではないかということです。それぞれがそれぞれの「水俣病」を語る事ができるのであれば、「主」と「従」というようなものを想起させるような名称で、両者を区別する必要がないのかもしれない、仮に区別するにしてもその主従というような関係を想起させるようなものではなく、何か別な名前を求めていく必要があるのではないかと考えています。ですから、「語り部補」という名称が使われ続け、主従という関係性が維持される限り、「水俣病」を語り継いでいく作業というのは、今後どこかで途絶えてしまうかもしれない、そういう危険性を孕んでいるのではないかな、というように思っています。

## 「当事者性」について

ここまで水俣病資料館の語り部制度に関する問題点を指摘させてもらったんですけども、ここからは四日市に公害資料館、公害資料館という名前になるかどうかはわかりませんが、とりあえず公害資料館と呼ばせていただくとして、その公害資料館が四日市にできた場合に考えなければならない問題、課題ですね、それについてお話ししたいと思います。

まず結論から申しますと、誰が何を語るのかという問題を考えるときには、狭い意味での当事者という枠組みから離れて、「当事者性」を中心に議論を進めていく必要があるのではないかと、ということです。これが、私の一番言いたいことです。患者さんでかつ現在語り部活動を行なっているのが、当時の裁判の原告の一人であった野田さんお一人である、という四日市の現状を考えると、非常に重要な点だと私は思っています。

ただ、「当事者性」を中心に議論を進めていくということですけども、そこにはやはり越えなければいけないハードルもいくつかあるというように思っています。そのなかの一つが、語り部の話を聞く側の期待感ということになります。これは、「障害者」の「当事者性」について考察している野崎さんという方がおられるんですけども、その方が言っていることをちょっと引用させていただきますと、「当事者本人が何かを主張するとき、そこに『正しさ』とは無前提には結びつかないが、それでも私たちは『当事者の話』をあるレベルで<重み>をもって受け止め」がちである、ということを言っています。確かに私たちは、当事者とは、水俣病患者とせいぜいその家族、あるいは四日市ぜんそく患者とせいぜいその家族、そういった人たちでなければ重みのある話ができない、まあカッコ付の重みなんですけれども、重みのある話ができないというふうに思い込んでいる節がどうもあるような気がします。せっかく資料館まで足を運ぶんだから、そうした話を聞けるはずだ、といった思い込みがあるのではないかと、ということです。けれども、そうした来館者の期待、つまり私たちのもっているある意味で当たり前、カッコ付の当たり前なんですけれども、それをちょっと脇において考えない限り、語り継ぐというという行為はどこかで途絶えてしまうのではないかと、という危惧をもっております。

つまり、語り部とは、体験者や生き証人といった狭い意味での「当事者」でなければならない、というように枠をはずせば、語る者と語られる者の関係性の中から自ずと誰が何を語るのか、というのが決まってくるのではないかと、というように思っています。患者だとかその家族でなければわからないとか、当時を知る人間でなければ語れない、という思い込みを捨てて、かかわりの深さによってその人でなければ語れないものがある、というように考える方がより有効なのではないかと、思っています。

ですから、大事なのはまず問題と出会うこと、その問題を自分の問題として捉えていく、そしてその問題解決のために考えて行為する、こうした一連の過程を経ることで、そしてその語り、語られるという関係性のなかで、「当事者性」を深めていくこと、それが大事になってくるのではないかと、思っています。

す。

水俣病や四日市公害の記憶を継承するという事は、「語り部」によって一方的になされるものではないわけですね。それは、ある意味で語る者と語られる者の共同作業によってなされるものではないか、語りの場ってというのは両者の「当事者性」が深まっていく過程というようにとらえるべきなのではないかと思います。したがって、まず私たち自身が、語り部というのは体験者、あるいは生き証人といった狭義の当事者でなければならないとか、四日市公害の記憶の継承はそういった語り部によってなされなければならないのだ、というような思い込み、自分たち自身のいわゆる当たり前というのをひとまず脇に置いて考えること、そういう必要があるのではないかと思います。

幸い四日市では、こうした当たり前というのがそうではないんだ、ということをも身をもって示してくださっている方がすでに存在しているわけですね。それは、ここにいらっしゃる澤井さん、山本さん、伊藤さんをはじめとした市民塾の皆さんです。患者ではないこうした人たちが、自分と四日市公害とのかわりというのを長年にわたって語ってきている、このことが私は公害資料館を作るうえで、大きな財産になるはずだというように思っています。

もちろんいいことだけでなく、課題もあります。こうした方々がいくらがんばったとしても、いかんせん人数が少ないわけですね。ですから、この方たちの力だけで対応できるわけではない。もっともっと語り部の数を増やしていく必要があるわけです。この点でも、すでに市民塾の皆さんが語り部養成講座を開いたりして努力していらっしゃいますけれども、もっともっと力を入れていく必要があるし、そのためにはここにおられる皆様の協力も必要だと思っています。

実は、一年ほど前に初めてこちらに足を運んだわけなんですけれども、私が四日市に来たいと思ったのは、市民塾のホームページはみなさんご覧になったことがあると思いますが、非常にしっかりしたホームページですね、そのホームページにまず出会ったからです。そのホームページのなかで、いろいろと情報発信をしているんですが、そこに若手メンバーの人たちの活躍というのが載っていました。その若手メンバー、ここには来てもらえないようなんですけれども、榊枝さんという方ですね、その榊枝さんたち若手の方たちの活動というのをもっと知りたくなったんですね。それで是非四日市に来てもらおうと思ったのが、一つの理由だったわけです。

榊枝さんたち若手メンバーが作っているミニコミ誌で『なたね通信』というのがあるんですけれども、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。その『なたね通信』8号に「公害地域から環境のまちを目指して」という記事が載っていました。そのなかで、彼が次のように話しています。ちょっと引用させてもらいます。

四日市公害の歴史を後世に伝え、なおかつ現在四日市で問題となっている大気汚染の問題などに関する状況を発信する環境情報誌（なたね通信のこと）であるなら、もっと公害問題によって被害を受けた方々に対して聞き取りをしなければなりません。四日市公害問題を社会へ告発し、裁判を闘った患者さんたちに失礼がないように、改めてその功績を称え、一方で公害によって傷ついた関係者の方々の気持ちを理解できるように努めていきたいと考えます。そして、公害の教訓を語るのであれば、私たち自身がもっと学び、積極的に患者さんとお話をしながら、二度と同じ過ちをくりかえさないよう四日市の経験を発信していきます。これを当面の私たちの課題としましょう。

これは、榊枝さんが書かれた記事で、患者とともに40年近く名古屋南部地域の大气汚染と闘ってきた伊藤栄さんという方、その方に彼がインタビューをして、その時の体験を振り返って書かれた感想です。この記事から伝わってくるのは、被害を受けた方たちの聞き取り調査の必要性和、それによって自分たちが学びなおすのだという、そういう決意だと思います。こうしたそのいわゆる学びなおしという作業ですけれども、それこそが「当事者性」を獲得するための可能性を切り開いてくれるのではないかと、いうように私は思います。

そのことを指摘しているのが、先ほどちょっと沖縄にも触れますというように言ったんですけれども、屋嘉比収さんです。この間お亡くなりになられた歴史学者ですが、その方が『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』という本を書いております。屋嘉比さんは、この本の巻頭言で、ちょっと引用しますと、「今、戦後世代の私たちに問われている緊要なことは、非体験者としての位置を自覚しながら、体験者との共同作業により沖縄戦の<当事者性>を、いかに獲得していくことができるかにある」というようにおっしゃっています。自らの立ち位置を自覚して、これまでの見慣れた風景というものが絶対的なものではなかったことに気付いていく、こうしたプロセスのことを学びなおしというふうに彼は定義しているわけですね。

屋嘉比さんが言っていることというのは、榊枝さんが『なたね通信』の記事のなかで述べた決意ですね、それと重なる、というように思っています。つまりその学びなおしというのは、自分にとっての四日市公害を問い直す、ということです。その問い直しに力を貸してくれるのが、体験者の声、ということになるわけです。

## 「語り部」を志す人々

だいぶ長くなってしまいましたが、最後にこの学びなおしのプロセスを経て語り部になったであろうと思われる人、その人の語りの場というのを紹介して、私の話を終わりにしたいと思います。

それは、また沖縄なんですけれども、佐喜眞美術館というところなんです。その館長である佐喜眞道夫氏の語りの場面です。

これがホームページからとってきたんですけれども、佐喜眞美術館の全容です。佐喜眞美術館というのは、沖縄県の宜野湾市上原というところにあります。ここは昔、普天間航空基地だった土地なんです。佐喜眞さんのご先祖ってというのが、その土地の所有者だったんですね。こうこうこういう理由で美術館をつくるので、土地を返して欲しい、と言ったら、日本政府に言っても何の反応もなかったんですけれども、米軍に直接言ったらあっさり返してくれたらしいんです。その土地に美術館を建てた。この地にどうして美術館を建てなければいけなかったのかというと、ある理由があって、それは丸木伊里・俊さんが描かれた『沖縄戦の図』というのをこの地に展示したかった。東京に佐喜眞さんがいらっしゃる頃からお二人との親交があって、丸木伊里・俊さんたちがこの『沖縄戦の図』はやはり沖縄にあった方がいいだろう、ということで引受先というのを探してらっしゃったんです。しかし、どこも引き受けてくれない。だったら佐喜眞さんが美術館を建てちゃおうということで、そこから話が始まったということです。ですから、この美術館の屋上に上ると、そこが基地のフェンスに隣接しているというのがよくわかります。

沖縄には、年間40万人以上の中学生、高校生が修学旅行や平和学習で来るのだそうですが、その一割強がここを訪ねてくるといわれています。先ほどお話ししました丸木伊里・俊さんの『沖縄戦の図』が、

この美術館の目玉ということになります。丸木伊里・俊さんというのは『原爆の図』で有名な方なので、改めて説明する必要はないかと思いますが、このお二人から譲り受けられた『沖縄戦の図』を飾るために、1994年に、佐喜眞さんが私設の美術館を建てられたわけです。

『沖縄戦の図』というのは、ここにありますように、縦4メートル、横8.5メートルという巨大な絵です。佐喜眞さんは、この絵の前で修学旅行生たちに語りかけるわけです。ちょっとその冒頭の部分をご紹介します。

私は戦争を理解するためには、戦争の状況をしっかり勉強すると同時に想像力が必要だと考えています。この大きな絵を説明します。想像力をたくましくしてみてください。これは大きな戦争の絵ですけども一人の兵隊も描いてありません。戦争というのは国がやります。政府が戦争をします。ですから国の側から見た戦争の話はたくさんあります。しかし、この絵は違います。この絵に描いてあるのは、女性たちと子どもたちとお年寄りです。つまり、戦争という状況の中で、一番ひどい目にあう側から見た戦争の絵です。

この後で、国家と天皇、国民の関係というのを簡潔に説明してから、絵に描かれているそれぞれの状況というのを佐喜眞さんは説明していくわけですね。そして、「この絵と実際の沖縄戦とどう違っているのか少し話をしましょう」ということで、この絵に描かれていないものの説明へと移っていきます。そのなかの一部をちょっとご紹介します。

さきほど沖縄戦で20万トンの爆弾が打ち込まれた話をしましたが、沖縄戦でアメリカ軍がもっとも多く使った爆弾は250キロ爆弾です。250キロ爆弾が一発落ちてきますと地上はどうなるか。50メートルプールぐらいの穴があく。半径700メートル以内の木造住宅は吹っ飛んでしまう。これが250キロ爆弾。一坪に1トンといいますと、一坪にこの爆弾が4個落ちたことになる。この部屋は44坪あります。この部屋でいいますと176発が落ちた計算になります。

というような説明をなさるんですね。この絵を見る者、それから話を聞く者たちの想像する力というのを引き出すために、このような具体的な数字というのをを用いて、佐喜眞さんは説明を続けていくんだと私は思います。こうした説明をされると、否が応でも、沖縄戦の悲惨な状況というのを想像せざるを得ないということになるわけです。

実は、佐喜眞さんというのは沖縄戦を経験していないんですね。この絵を描いた丸木伊里・俊さんたちも沖縄戦は経験していないですよ。当然のことながら、佐喜眞さんの話を聞いている人たちというのも経験していない人が圧倒的に多いわけです。この場面に私自身も身を置いてみたんですけども、ここでの経験というのは、三者が一体となって直接知り得なかった沖縄戦というのを追体験している、そういった場にあるような感覚をもったことを記憶しています。こうした追体験を可能にしているのが、この絵の訴求力とそれに魅せられた佐喜眞さんの語りなのだと思います。

ここで私が重要だと思うのは、この『沖縄戦の図』を媒介とした語る者と語られる者の追体験の場、ここには主従といった関係性が存在しないことだと思います。それぞれがあの場合での追体験を通して、

自分にとっての沖縄戦というのを学びなおしている、ということになるのではないかというように思います。

繰り返しますけれども、佐喜眞さんというのは、沖縄戦を直接体験していません。沖縄への米軍の攻撃が始まる前に一家が熊本に疎開しました。その疎開先である熊本で、生まれ育ったのが佐喜眞さんなんですね。ですけれども、彼が身をもって示しているように、だからといって、沖縄戦を経験していないからといって、沖縄戦を語れないことはないわけです。

ですから、当時を知らないから四日市公害のことを語れない、ということはないと思います。ともに学びなおしていく、そういった姿勢で臨めば、語ることは可能になるのではないかと思います。また、可能になるだけじゃなくて、そうしなければならぬ、そうしなければ水俣病、四日市公害という負の遺産を語り継いでいくということができなくなってしまう。結局、再び同じような悲劇が生まれてしまうことになるかもしれない。というか、悲劇はもう起こってしまったわけですね。私たちは、その再び起こってしまった原発事故の意味というのをもっともっと考えていく必要に迫られているんだと思います。

そして、次の悲劇を生まないためにも、語り継いでいくことの重要性というのをともに考えていきたいと思っています。そして語り継ぐことを可能にしてくれる場、つまり公害資料館というものを私は本当にここでもぜひ実現させてもらいたいというふうに願っています。私も本当に微力ではありますがけれども、そのためのお手伝いが出来ればなというように思っておりますので、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いします。

今日は、長い間お付き合いいただき、本当にありがとうございました。